

「地域子育て支援拠点研修事業」＜埼玉開催＞

“拠点事業”から広がる 親育ち・子育て・地域づくり

平成21年7月20日「地域子育て支援拠点研修事業」＜埼玉開催＞が行われました。今回のセミナーでは、定員200名のところ、埼玉県外、東北から沖縄まで82名の参加者を含め279名と定員を大幅に上回る方々にご参加いただきました。会場いっぱいの熱気の中、「埼玉県地域子育て支援拠点ガイドライン」を軸に午前中は基調報告、基調講演、パネルディスカッションが行われました。午後からの4つの分科会ではテーマにそった、話題提供とともにワークショップをおこない、全体会では地域子育て支援拠点への展望を登壇者にお話いただきました。参加者自ら日々の実践・活動を振りかえり、研修後の活動に活かせる実践に即したセミナーとなりました。



開催概要

- 開催日 2009年7月20日(月・祝) 9:45～16:45
- 会場 埼玉会館 (〒330-8518 さいたま市浦和区高砂 3-1-4)
- 主催 財団法人子ども未来財団・NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会
- 後援 厚生労働省・(社福)全国社会福祉協議会
埼玉県・(社福)埼玉県社会福祉協議会
- 協力 地域子育て支援拠点研修事業「埼玉開催」実行委員会
NPO 法人新座子育てネットワーク
- 参加者 279名(男性19名・女性260名)
(行政64名、NPO任意団体94名、他団体・企業61名、その他60名)

開催趣旨

平成19年度より、つどいの広場事業、地域子育て支援センター事業を統合し、児童館などのスペースも活用しながら、地域子育て支援拠点事業(ひろば型、センター型、児童館型)が新たに再編されました。そこで、行政とともに地域における子育て支援拠点間のネットワークを図りながら、地域子育て支援拠点の意義と役割を検証しました。また、拠点スタッフ一人ひとりが日頃の活動を振り返り、見識を深め、スキルアップに寄与することを目的としました。

プログラム趣旨

埼玉県では、今年 3 月に「埼玉県地域子育て支援拠点ガイドライン」が策定されました。本セミナーでは、このガイドラインを軸に、地域子育て支援の原点に立ち、県内そして全国から優れた実践例を招き、地域子育て支援を切り拓いてきた研究者や専門家とともに、拠点の果たすべきミッション(目的・意義)と役割を共有し、資質向上を目指しました。

プログラム

開会挨拶・主催者挨拶

財団法人子ども未来財団 専務理事 高橋秀夫さんより、開催にあたっての主催者挨拶。

後援挨拶

埼玉県福祉部少子政策課 課長 内山晃治さんより、埼玉県内の地域子育て支援拠点の現状と取り組みの紹介とともに、後援団体を代表し、ご挨拶をいただきました。

プログラム 1 基調報告 10:00~10:30 会場:小ホール

テーマ「地域子育て支援拠点事業の概要と展望」

朝川 知昭 さん 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課 少子化対策企画室 室長



「地域子育て支援拠点事業」が今年 4 月より、児童福祉法に基づく第 2 種社会福祉事業として位置づけられ、全国への展開と社会的認知度を高めていくよい機会を迎えている。

その好機を活かすために、拠点のスタッフには、自己流ではなくどの施設でも統一された認識とともに、質の向上を求められる転換期。

これまでの社会福祉事業と違い、拠点事業はすべての子育て家庭を対象とし、親支援を通して、子どもに対する福祉を向上させていくという2つの意義をもった事業であるという、事業の根幹を確認。

加えて、今年度の予算、財源を踏まえた支援策、最新の政策の動向を解説いただきました。

プログラム 2 基調講演 10:30~11:00 会場:小ホール

テーマ「ガイドラインに込めた地域子育ての未来」

西郷 泰之 さん 大正大学 人間学部 教授

「埼玉県地域子育て支援拠点ガイドライン」策定委員長である立場から、県内の拠点調査から見えた、地域子育て支援拠点の現状と、直面する課題を報告。

ガイドラインはゴールではなく、地域子育て支援拠点の発展の方向を示す「道しるべ」として作成されたこと、県内の拠点から提供された事例で構成されたガイドライン別冊についても説明いただきました。

地域子育て支援拠点が「施設」ではなく、さまざまな活動の「拠点」になってほしいという期待とともに、拠点になるための視点、具体的なアプローチの仕方を上げ、実践的なアドバイスを含む講演となりました。



プログラム3 パネルディスカッション 11:00~12:00 会場:小ホール

テーマ「センター・ひろば・児童館、共通のミッションに向かって」

【コーディネーター】西郷 泰之さん 大正大学 人間学部 教授

【パネリスト】 岡本 聡子さん NPO 法人ふらっとスペース金剛 代表理事

黒沢 稔枝さん 埼玉県熊谷市 第3なでしこ保育園 子育て支援センター
すずかけ 所長

飯吉 昌子さん 京都市嵯峨野児童館太秦分室 つどいの広場まっこりスペース

プログラム2の西郷さんをコーディネーターに、ひろば・センター・児童館での先駆的な実践者3名のパネリストが登場。ひろばからは岡本さん、センターからは黒沢さん、児童館からは飯吉さんとそれぞれの立場から、各地域の特色と拠点の概要や実施状況を発表していただきました。

3者ともタイプは異なっていますが、交流の場を設定し、人と人、地域をつないでいく積極的な取り組みが紹介されました。

西郷さんから、地域子育て支援拠点は、「地域」がキーワード。子どもだけでなく、高齢者も障がいを持つ人もすべての人々が支えあえる「地域づくり」、「地域開発」の視点が重要、との指摘がありました。

拠点が親同士を結びつけ、その関係を地域へ還元し、拠点到循環していく仕組みをつくるのが、地域子育て支援拠点の発展につながっていく、との提案がなされました。



プログラム4 分科会●第1分科会 (13:00 開場)13:10~14:55 7階7A会議室

テーマ「子どもが育つ」「子どもを育む」拠点づくり

【話題提供者】 丹羽 洋子さん 育児文化研究所 所長

【ファシリテーター】 嶋村 由紀子 さん NPO 法人川越子育てネットワーク 理事



丹羽洋子さん

第1分科会は「子どもが育つ」「子どもを育む」という視点から、子育て支援拠点の役割について丹羽洋子さんから、話題提供していただきました。

人間は社会性に富んだ生き物で、共同体の中で生活し、子育てもして生き残ってきた種族であること。同じ類人猿としてチンパンジーの赤ちゃんは、つねに母親に抱きつき、一体で育つのにに対し、人間の赤ちゃんは、母親から離れて育つ。このことは、両親の他に多くの人々が子育てに関わることができるという違いについて話されました。

母親1人で子育ての負担を背負う現状は、人の進化や歴史から見て、その流れに逆らっているため、苦しさを伴うことを指摘されました。

また、丹羽さんが所属している赤ちゃん学会で、各分野の研究者たちが「人間というのは、みんなで子育てするもの」と盛んに発表していることは興味深い点であると報告されました。

話題提供ののち10グループにわかれ、ワークショップを行いました。テーマ1:「みんなで育てる」と聞いてイメージすることを、各自ワークシートに書き込み、グループで話し合い、発表。

引きつづき、2:利用者にとっての拠点の役割、3:子育て支援者にもとめられること、4:地域に求めること・地域から求められること、について話し合い、グループごと発表しました。

4つのテーマを討議したあと再び1つ目の「みんなで育てる」という主題にもどり、参加者それぞれが最初にあげたイメージから、「拠点」「地域」という視点を含んだ意見への広がりを実感しました。



ファシリテーター
嶋村由紀子さん

分科会のまとめとして、参加者それぞれが地域にもどって実践していきたいことをワークシートに記入。各グループ、余白がないほど書き込まれたワークシートは、全体会の会場前に掲示しました。

最後に、丹羽さんは参加者に「地域子育て支援拠点は、親子が地域と出会う場であり、親が子どもを知り、学び、発見する場。拠点スタッフは、地域の子育て機能を生み出す活動に携わっている誇りを持ってほしい」とエールを贈りました。



プログラム 4 分科会●第2分科会 (13:00 開場)13:10~14:55 2階ラウンジ

テーマ「親の子育てをエンパワーする支援力」

【話題提供者】 新澤 誠治 さん 子育て支援推進センターみずべの会 代表

【ファシリテーター】 榛沢 敦子 さん 埼玉県新座市児童センターつどいの広場 セサミスタッフ

【サブファシリテーター】 木村 ひろみ さん・青砥 裕子 さん NPO 法人新座子育てネットワーク



新澤誠治さん

前半は、新澤誠治さんが、これまで子育て支援に関わってきた約50年の経験の中から、「親」の子育て力を引き出す支援と関わり方という観点から話題提供をしていただきました。

今、「地域子育て支援拠点」に求められている役割、課題として挙げられたキーワードが「当事者性」「主体的な参加」「ノンプログラム」「継続性」。それらのキーワードが明確にイメージされるよう、いくつかの具体例を含めながら、(1)子育てひろばで見てきたお母さんたち、(2)親の誰でも内に秘めているエンパワー、(3)「ひろば」の機能 エンパワーを引き出すために、(4)エンパワーへの目覚めともう一步前進という4つのテーマに沿って話が進められました。

後半は、10グループにわかれ、グループセッションを行いました。これまでの「親」に対する関わり方・考え方と聴講した話とを重ね合わせ、今の心境や抱える悩み、新たな気づきなど、自由に討論しました。その後のグループ討論発表の場では、対応に困難を感じる現場のさまざまな状況がありながらも、「親」の置かれた立場と「ひろば」の役割に理解を深め、信頼、共感、受容の気持ちと笑顔を持つことから始めたい、という前向きな意見が多く聞かれました。



ファシリテーター
榛沢敦子さん



最後に、新澤さんから「お母さんたちのなかには、人との交わりや集団に入ることに緊張し、そっとしておいてほしいという人もいます。でも認めてもらうことで、自分に気づき、学び、変わっていく。地域子育て支援拠点は、地域の人とつながり、関わりをもてるようになる機能がある。そして、母親が一人の人間として育つ場、父親の地域の居場所にもなる「生きる拠点」として一步前に進んでほしい」というメッセージとエールをいただきました。

テーマ「地域子育てを育み結ぶ拠点の役割」

【話題提供者】 山縣 文治 さん 大阪市立大学 生活科学部人間福祉学科 教授

【ファシリテーター】 森田 圭子 さん NPO 法人わこう子育てネットワーク 代表理事

「みなさんの実践そのものが事例報告です」という山縣文治さんのあいさつで第3分科会は始まりました。

グループワークを中心に、14グループで2つのテーマを中心に、話し合いました。ひとつ目のテーマは、「地域と拠点のつながりや協働をどう生み出しているか」について。カラフルな付箋に意見を書き出し、参加者で回覧し、まとめながら意見を出しあうワークを行いました。

ふたつ目のテーマでは、「課題に感じていること」として、活動していく上で今抱えている課題について話し合いました。各グループからの報告で、参加者に共通する課題や、行政の拠点に対する捉え方、運営母体のスタッフにとっての拠点のあり方、利用者との認識のずれで、苦勞している点があげられました。

また、拠点に來ない人へ、情報をとどけるための工夫や様々なアウトリーチの例もあげられました。



山縣文治さん、森田圭子さん



山縣さんは、「地域を考えるうえで、スタッフが地域を把握していることが重要であり、行政との連携はさらに必要」とコメント。

「子育て支援拠点の向かう先は、子どもでもあり、親でもあり、その親子が地域とつながり、社会に結びついていく力を育てていくこと」というアドバイスをいただきました。

終了時には、参加者が共有した時間を喜び、掛け声をかけての終了となりました。山縣さんのユーモアあふれる進行で、笑いのあふれる分科会となりました。

テーマ「行政担当者のためのガイドライン活用」

【講師】 内山 晃治 さん 埼玉県福祉部少子政策課 課長



行政担当者が3分の2、現場のスタッフ3分の1の割合で27人の参加者が内山晃治さんを囲む形で分科会がすすめられました。埼玉県の策定した「地域子育て支援拠点ガイドライン」の説明と、その策定前の、県内全拠点へのアンケート調査で浮かび上がった現状を報告。

県内拠点の現状として、「研修を受ける機会が少ない」「利用者が少ない」「日誌がなく、月間・年間の計画がない施設がある」「質を高めるための仕組みが十分でない」など課題が紹介されました。

ガイドラインのポイントをていねいに解説しながら、基本理念について説明していただきました。

また、利用しやすい拠点とするための適切な広報の仕方など、内山さんと、参加者との間で活発な意見交換も行われました。

アンケートだけではなく、内山さん自らさまざまな拠点をまわり、行政が作る堅苦しい視点ではなく、実際の現場を見た中で、大事にしたい部分ととりいれながら作成にあられた背景も報告。



参加者からは、行政担当者だけでなく、現場や NPO で長い間子育て支援に携わっている方からも、「行政中心ではなく、地域特有の、地域を中心とした活動を大切にしたい」という意見が上げられました。

子育て環境の向上に向けて、行政担当者だけでなく、現場スタッフや NPO スタッフで意見交換ができた、意義のある分科会となりました。

プログラム 5 全体会 15:00~16:30 会場:小ホール

1) 分科会報告

第 1 分科会 報告者：嶋村 由紀子さん 第 2 分科会 報告者：榛沢 敦子さん
第 3 分科会 報告者：森田 圭子さん 第 4 分科会 報告者：佐野 育子さん

プログラム 4 分科会のまとめとして、第 1 分科会～第 3 分科会は、各分科会を担当したファシリテーターから報告。第 4 分科会は報告担当者が報告し、参加者全体で分科会の情報を共有しました。

2) 意見交換と提言

テーマ「地域子育て拠点への期待とエール」

【コーディネーター】坂本 純子 さん NPO 法人新座子育てネットワーク 代表理事
【登壇者】丹羽 洋子さん 新澤 誠治さん 山縣 文治さん 西郷 泰之さん



新澤誠治さん



丹羽洋子さん



山縣文治さん



西郷泰之さん



コーディネーター
坂本純子さん

ガイドラインという新しいツールを得た、埼玉県地域子育て支援について「基準が最上のものになってしまうと、それ以下でしか仕事ができなくなる可能性がある」と登壇者から意見があげられました。

新澤誠治さんは、「法律に位置づけられたことで、施設化し、硬直化し、地域との関わりをなくし均一化されることが心配」と述べられました。

山縣文治さんは「細かいところまでルール化されることで、公的な活動や民間のよさが失われないよう、ガイドラインを活用してほしい」と指摘。

また、西郷泰之さんは、ガイドライン策定委員長の立場から「埼玉のガイドラインの肝のひとつが、地域の主体的な活動を応援、支援し、生み出すこと。親自身の活動、地域の活動もそう。熱意ある活動を展開していく人たちを、応援していく仕組みをつくりたい」と思いを話されました。

「拠点ができていけば、子どもたちが地域で育つようになる、というような簡単なことではない。町を変えていかなければならない、それも大胆に。ガイドラインができたことは一歩前進だが、みなさんの指摘のように、しぼりになり、独創的なエネルギーにブレーキをかけてしまう心配がある。『子ども』という視点を加え、打ち破っていく力が必要だと思う」と丹羽洋子さんは提言。

熱意ある活動の展開を応援していく仕組みであるガイドラインが、ゴールにならないように、拠点に携わるスタッフが、「何を大切に」「どういう地域をつくっていきたいか」という夢を日々描きながら実践してほしいと、登壇者の皆さんからエールをいただきました。